●楠正行くすのきまさつらかるた

あ　後を頼むと父の遺訓 見交わす顔に散る涙

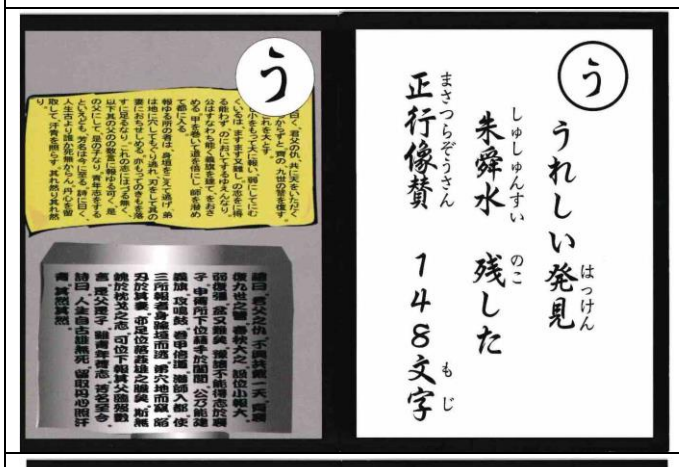
延元元年 1336、正成は尊氏の東征を目の前に、後醍醐天皇に「尊氏との和睦策、帝の比叡山臨幸策」を献策しますが、湊川に下るべしとの命を受け、“この戦破るべし”と死覚悟で湊川に向かいます。

櫻井の駅で、子、正行を呼び寄せ、「父死後、金剛山に籠り、天皇をお守りせよ」と遺訓を残し、正行を河内に帰しました。正成、正行子別れの場面です。

い 今も正行眠る小楠公墓　二本の若木一本の大木に成長

正平 3 年 1348、1 月 5 日、正行は戦いに敗れ、四條畷の地で終焉を迎えました。しかし世は足利の時代、世を憚ったのか正行の墓はすぐには建てられませんでした。

ようやく、正行死後 82 年たって、小石碑とともに 2 本の若い楠が植えられました。この 2 本の若い楠は、やがて成長し、小石碑を胎内に包み込んで、2 本の木が 1 本に和し、現在のような立派な大樹に成長しました



う　うれしい発見朱舜水残した正行像賛 148 文字

清に滅ぼされた明の再興運動に尽くした儒学者朱舜水。長崎に亡命し、安東省庵と知己を得て、やがて徳川光圀に請われて水戸学の師となった人物です。

正成像賛は元禄 5 年 1692 徳川光圀が建立した嗚呼忠臣楠子之墓の碑影に刻まれたことで一躍世に出、有名となりましたが、正行像賛は、その存在すらほとんど知られていませんでした。

え　栄華の誉れ志貫き通し義に生きた　畷の誇り楠正行

四條畷の合戦は正行千騎と高師直四万の戦いでした。

兵の数について、多くの論拠が太平記にあることから、一般的には正行 3 千、師直 6 万とされていますが、楠氏の兵力は総勢 3 千程度と思われ、正行討死後、弟の正儀は 1 年半にわたり交戦を続けていますので、２千程度の兵を残し、出陣したのは 1000 騎程度の精鋭兵でした。

お　大君に仕えまつるも今日よりは　心にそむる墨染めの袖

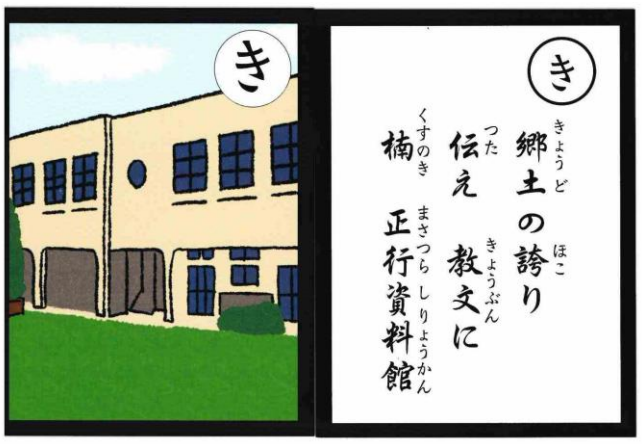
弁の内侍は四條畷の合戦で壮烈な最後を遂げた正行の真意を知り、深い悲しみに沈みますが、正行への追慕の情を絶ちがたく、遂に黒髪を切り尼となって吉野山を下り、山口村龍門の西蓮華台院（現在の西蓮寺）に入り寂滅する日まで正行の菩提を弔い、正行への貞節を守ったといわれています。

この歌は、正平 3 年 1348、弁の内侍出家詠草で、如意輪寺境内には、弁の内侍が下した黒髪を埋めた場所と云われる至情塚が、今も残っています

●楠正行くすのきまさつらかるた

か　かえらじとかねて思えば梓弓　なき数に入る名をぞとどむる

　四條畷の合戦を前に、如意輪寺の本堂に詣でた正行は、その板塀に鏃で、「かゑらじとかねておもへハ梓弓　なき数に入る名をぞとどむる」と、辞世の歌を刻みます。
この歌の大意は、今度の合戦は、生きて帰れぬ身であると思っているので、死者の数に入るわが名を書きとどめて出発する、との覚悟をうたったものです



き　郷土の誇り伝え　教文に楠正行資料館

　教文とは、四條畷市立教育文化センターの略称です。今、四條畷市立教育文化センターでは、楠精神を学ぶ場として「楠正行資料室」をオープンし、多くの資料や書籍等を展示しています。
このかるたで楠正行に興味を持たれた方は、是非とも足を運んでいただき、郷土ゆかりの人物に思いをはせてください。

く　国追われる高山右近胸中を正行辞世の歌に託して

　秀吉、家康の時代になりキリシタン弾圧が強化されると、改宗しなかったキリシタン大名高山右近は、家康の国外追放でマニラに流されます。
その時書いた日本訣別の書の中で、正行辞世の歌を引用し「正行公は戦死して名を上げた。が、私は南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかり。」と、正行とは違い、死ぬことを許されず、はるか異国に赴いた右近の心情が綴られています。

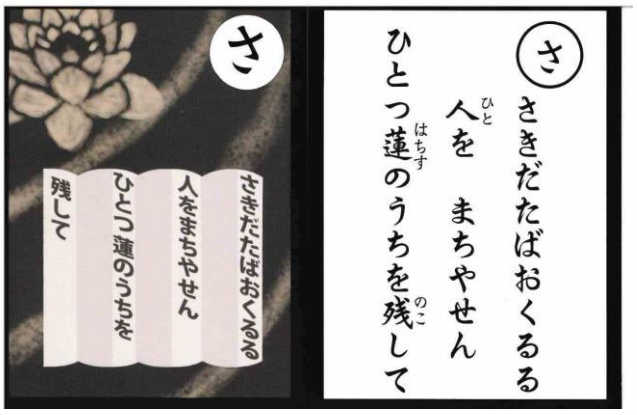
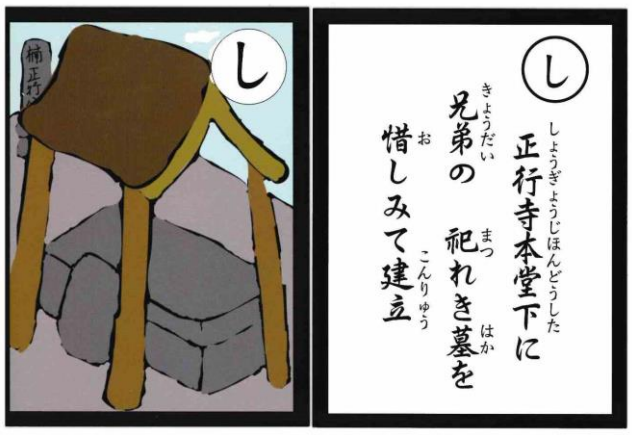
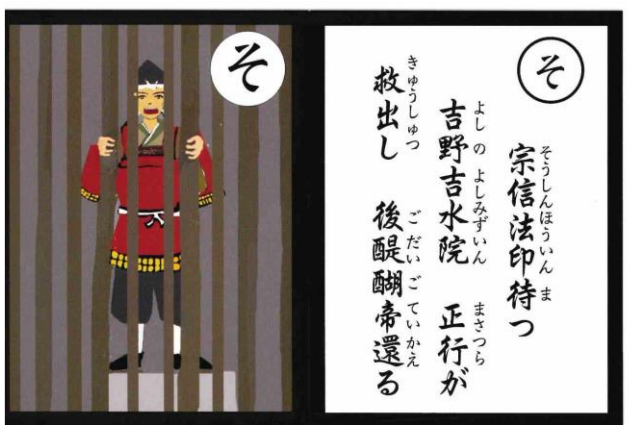
け　激闘の兄弟畷で力尽き　忠義の生涯津の辺で終える

　1000 騎の軍勢も、今や 30 数騎となり「敵の手にかかるな！」と最期の地を探し求め、深野池の堤防そして権現川の堤の上あたり、津の辺の地に適地を見つけ、正行、正時合向かい合って座し、「正時、よく戦ってくれた。もはやこれまで。」と正行、そして正時も「兄上と戦うことが出来本望です。共に。」と云いながら、二人刺し違えて討ち死にしました。
大東市津の辺の、この地には字名「ハラキリ」が残っています。

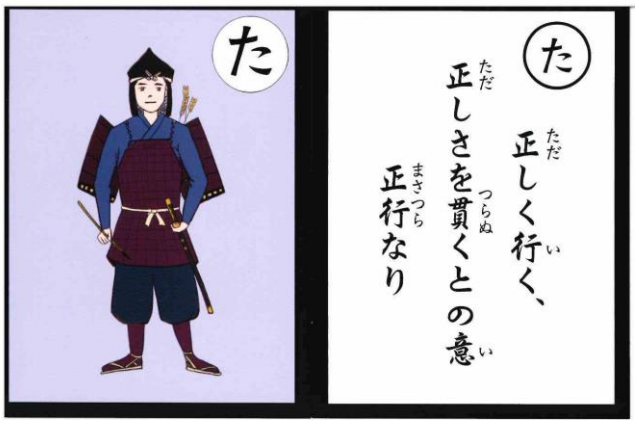
こ　子わかれの松のしずくに袖ぬれて　昔をしのぶ桜井の里

　正成と正行の訣別の場所、桜井駅跡に明治天皇御製碑が建っています。明治 31 年 1898、11 月、三島地方での陸軍大演習に行幸された明治天皇が詠まれた歌で、書は海軍元帥東郷平八郎によるものです。

●楠正行くすのきまさつらかるた

	**さ　さきだたばおくるる人をまちやせん　ひとつの蓮のうちを残して** 正行は戦いに臨む思いを、辞世の文章として過去帳に残しました。 「各留半座乗花臺　待我閻浮同行人　さきだたばおくるゝ人を待ちやせん　ひとつ蓮のうちを残して　願以此功徳平等施一切　同發菩堤心往生安楽国」人間は死んだら蓮の台に座るが、みんなが来るまで待っているよ。同じ志を持って生まれてきた仲間のお前たちも仏になるに決まっているのだから。あの世でも、この世と同じように一つ屋根の下で住もうぞ。 正行の宗教・文学に通じた教養、学識、考え方がわかる辞世の文章です。
	**し　正行寺本堂下に兄弟の　祀れき墓を惜しみて建立** 正行の墓は全国６カ所にあります。 小楠公墓所（四條畷市）、山手町（東大阪市）、河内往生院（東大阪市）、宝筐院（京都市）、正行寺（宇治市）そして九州鹿児島の甑島です。 正行は、自分が万一のときは、首を吉野に届けてくれ、と安間了願・了意親子に頼んでいました。了意は、遺命に従って吉野をめざしますが、足利方に行く手を阻まれ、宇治の木幡に小さな祠を建てました。後に南北和し、正行・正時の墓の上に本堂が建てられ正行寺となりました。
	す　水分の里に守られはぐくまれ　若楠伸び育ち 正成、正行が日常生活した場所が水分の里です。 現在の千早赤阪村　の一角で、建水分神社、楠公誕生地（正成の館跡と云われる）楠公産湯の井戸（正成が産湯を使ったと伝わる井戸）、花屋敷（正行の館跡ではないかと云われる）寄せ手塚・味方塚（正成は、敵味方問わず供養塔を立て、しかも味方より敵＝寄せ手の塔が大きい）、下赤坂城址・上赤坂城址・千早赤坂城址など多くの歴史的遺産が残っています。
	せ　千古の営み辰砂を都に運ぶ楠氏　金剛山は宝の山 楠氏の根拠地は千早赤阪村です。そして、連なる金剛山があります。 金剛山で採れる辰砂は、当時京の女官たちの紅となって大変貴重な品物でした。楠一族は、これら辰砂を含めて、河内で採れる産物等を京の都に運ぶ運輸流通を取り仕切り、財を蓄えました。 また、金剛山は修経者の修行の場であり、修経者ネットワークを通じた様々な情報を手にする立場にありました。
	**そ　宗信法印待つ吉野吉水院　正行が救出し後醍醐帝還る** 湊川で正成が破れた後、後醍醐天皇は比叡山に臨幸していましたが、尊氏は巧みな話術と期待を持たせる誘いで、後醍醐天皇を京に迎え入れ花山院に幽閉します。 幽閉された後醍醐天皇は延元元年 1336、吉野方の手の者によって助け出され、河内、賀名生を経て、吉野山に入り、世に二人の天皇が存在する南北朝時代（北の京都、南の吉野）に突入しました。

●楠正行くすのきまさつらかるた

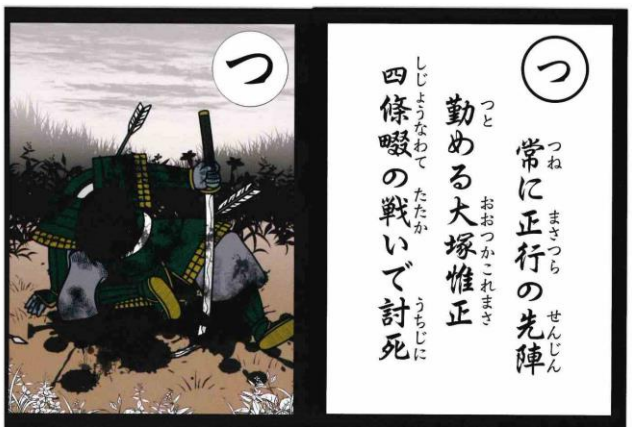


た　正しく行く、正しさを貫くとの意　正行なり

　正行はその名の通り自ら信じる正しさを貫き通し生きた人物です。
後村上天皇のあつい信頼を得た正行は、左衛門尉(宮城門の警護等)、検非違使(警察業務、訴訟・裁判も管轄)、金吾(総督長官の唐名)そして帯刀(東宮の護衛官)などの役職につきました。このため帯刀正行とも呼ばれています。

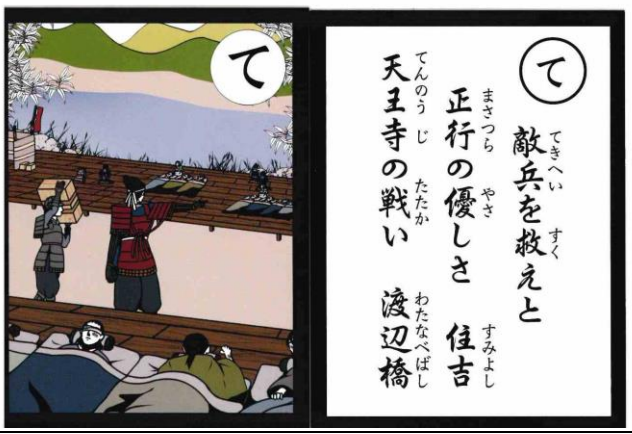
ち　父知らぬ正行遺児という子あり　池田の庄の城主になりて

　正行にはなんと子供がいました。正行には内室がいて四條畷の合戦の前にその内室には子供ができていたのです。しかし四條畷の合戦後、実家の能勢の内藤満幸は足利方に誼を通じ、怒った正儀は正行の内室を能勢に帰しました。
その後、内室は池田家城主の教依に嫁ぎ、教依は生まれた子供に池田教正と名付け池田家の嫡子・惣領として育てました。岡山池田藩は教正の子孫です。



つ　常に正行の先陣勤める大塚惟正　四條畷の戦いで討死

　大塚惟正は正行の側近の一人で攻め方の総大将でした。
　惟正は一貫して正行を支え続け連戦連勝の立役者となりましたが、正平3年1348、1月5日の四條畷の合戦で惟正率いる後陣が総崩れとなってしまい、正行と共に行動することができなくなりました。その後、正行の自刃を知り、1人敵陣に突っ込み非業の最期を遂げたと言われています。



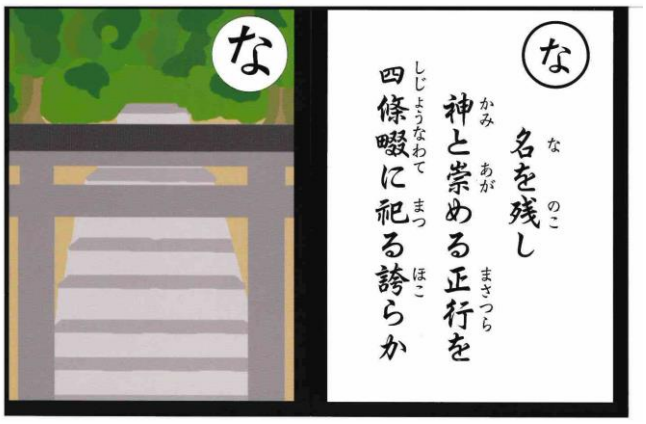
て　敵兵を救えと正行の優しさ　住吉天王寺の戦い渡辺橋

　住吉天王寺の戦い、渡辺橋の美談は平和主義者正行のエピソードの一つです。
　この戦いで敵兵を追い詰め、渡辺橋に殺到した敵兵の多くは川に落ち、溺れました。この時、正行は「戦いを止め。溺れる敵兵を救え。」と命じ、衣服を与え、傷を手当し、暖をとらせ武具まで与えて京の都に送り返しました。
　己の家門のための戦いではなく、天下国家平和のための戦いが故、溺れる兵を打ち負かす必要はないのでした

と　とても世にながらうべくもあらぬ身の　仮の契りをいかで結ばん

　正行は後村上天皇から弁の内侍を妻にと薦められました。しかし、父の遺訓を守り、吉野朝を守るため、死覚悟の戦いを決意した身で妻を迎えるわけにはまいりませんと、断ったときにうたった歌です。
　正行に残る唯一のロマンスともいえる弁の内侍との辛い、悲しい別れでした。

●楠正行くすのきまさつらかるた



な　名を残し神と崇める正行を　四條畷に祀る誇らか

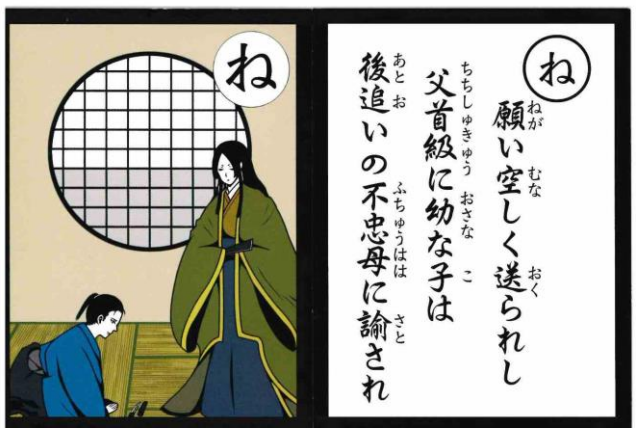
四條畷神社は四條畷の戦いで自刃した正行を祭神に弟の正時以下 24 柱を祀っている神社です。
住吉平田神社の神官、三牧文吾ら地元の人々の尽力で明治 23 年 1890、4 月 5 日、御鎮座祭を挙げました。境内には楠公父子別れの像、菅原道真公を祀る楠天神社、正行の母、久子の方を祀る御妣神社等があります。

に　入魂込め正行の別れ　汝は股肱の臣必ず生きよと後村上帝

正行は楠軍の力を背景に尊氏との和睦を画策しますが、北畠親房らに聞き入れられず和睦策を諦め、全面対決を覚悟します。
正平 2 年 1347、12 月、尊氏が高師直らの大軍を発したことを知った正行は、吉野に参内し、後村上天皇に別れの挨拶をしました。その時後村上天皇から「汝は股肱の臣。決して死ぬな。」と声をかけられます。
天皇の言葉にうれしさがこみ上げる正行でしたが、その覚悟は変わりませんでした。

ぬ　ぬかりなく吉野の宮を守りつつ　和睦で終わる道はなきかと

湊川の戦後、河内東条に押し寄せた足利軍と対した楠軍は、大塚惟正を大将として、岸和田氏、八木法達らが南部戦線を死守し、その後に続く北部戦線では、橋本正茂を大将に死守しました。そして情勢が落ち着くと、楠軍は吉野朝行在所の置かれた吉野山の警護にあたったとの記録が残っています。
後醍醐天皇の崩御に慌て、動揺する公家たちを鎮め、守りを固めるため正行は吉野山警固の陣頭指揮にあたりました。



ね　願い空しく送られし父首級に幼な子は　後追いの不忠母に諭され

湊川の戦で尊氏に敗れた正成の首級は、京の六条河原でさらし首にされた後、尊氏によって河内東条に送り届けられました。観心寺の中院で父の変わり果てた姿を見た正行は自責の念にかられ持仏堂に駆け込み、腹を切ろうとします。
正行の様子がおかしいと後をつけてきた母、久子は「なんと不心得をするのですか。父は後を追えと言いましたか。そなたのお役目は生きることではないですか」と訓戒され、この時、正行は正成の遺訓を胸に生きることを決意しました。

の　野原駆け竹馬ごっこで遊ぶ子は　心ひとつの頼もし友に

正行を語るとき、必ず登場するのが弟の正時と正儀、そして従兄弟の和田賢秀です。賢秀は幼いころから常に正行と共に学び、遊び、行動を共にしました。
正行より身体も大きく武闘派だったと思われる賢秀は、薙刀の名手と云われ、打ち続く戦いで大変活躍し、正行を支えました。
四條畷の戦いでは、最後に一人敵陣に攻め入りますが見破られ、敵を睨み続けて亡くなったことから、「歯神さん」と呼ばれ崇敬を受けています。